

「在宅医療」実態知って

きょう神戸で上演 医師ら創作劇



在宅医療をテーマにした創作劇の稽古をする医師ら
神戸市中央区

え、在宅治療の必要性を知ってからおつと演劇を企画した。

タイトルは「ピンピンコロリって無理なん知っとう？」。心不全などで入院を繰り返す85歳の男性を男性の家族が自宅で看取る様子を描いている。脚本は実際に在宅医療を行う医師が担当。せりふはアドリブで、在宅医療の現場を知るベテランの医師や訪問看護師らが、自らの経験をもとに、要介護者役や医師役を演じる。

「これまでは講義を行うことが多かったが、今回は笑いを交えて、看取りの現実を知ってもらいたい」（長尾さん）と吉本新喜劇のテーマ曲が流れるなど、笑いにもこだわった。

「役者」は多忙な医師らが多いため、全員そろっての稽古は15日に神戸市医師会館（同市中央区）で行われた1回だけ。それでも、参加した約20人は、シーンごとに分けて練習し、せりふの言い回しを互いに確認するなど真剣に稽古に取り組んだ。フォーラムは、和歌山県岩出市の医師、安川修さんによる「看取り」をテーマにしたギターの弾き語りも行われる。

外来、入院に次ぐ「第三の医療」として注目される在宅医療を広く知ってもらおうと、兵庫や奈良などの医師や看護師らが在宅医療をテーマにした演劇をつくり、28日、神戸市中央区の新神戸オリエンタル劇場で開かれる「近畿在宅医療推進フォーラム」で上演する。助監督を務める尼崎市の医師、長尾和宏さん(57)は「在宅医療に不安を抱く人は多い。劇を通して実態を知ってもらい、自宅で看取することを考えるきっかけになれば」と話している。

在宅医療は、自宅などで医師や看護師らの訪問指導を受け、患者を治療したり、介護するなどする。自宅など慣れ親しんだ場所で療養することで患者は安心できる一方、そばに医師や

看護師がいないことなどから在宅医療に尻込みする家族も多い。近畿で在宅医療を推進する医師らのグループは、自宅で家族をケアすることに不安を抱く人たちに、実態を分かりやすく伝